〈毀れ瓶〉 ―その寓意の成立をめぐって― (Ⅳ)

前野 みち子

十六世紀初めの一枚刷りに〈新しい歌〉と題して登場した「シュヴァーベン男に娘がいた」は、次のような詩連で始まっている。[1]

シュヴァーベン男に娘がいた
その娘(こ)はうちで働くのが嫌になってた
スカートとマントを欲しがってた
それから細い紐つきの靴を
ああ、可愛いエルゼライン

「スカートとマントが欲しいなら
それから細い紐つきの靴が
それならおまえはアウグスブルクへお行き
そこで黄金(こがね)を稼いでおいで」
ああ、可愛いエルゼライン

ここでアウグスブルクへ行って「黄金をかせいでおいで」と言い聞かせているのは、一体誰なのだろうか。確かに、農家の仕事を嫌い贅沢品を欲しがる娘を諌める両親の突き放した言葉ととれないこともないが[2]、むしろ娘の欲しがるスカートやマントの話をして聞かせた本人ととる方が自然に思える。例えばそれは水汲みの井戸端で得意げに町の流行(ファッション)を話して聞かせる、町のお屋敷奉公から里帰りしたばかりの娘たちだったかもしれない。あるいは当時アウグスブルクの町を本拠地としていた皇帝軍にシュヴァーベン各地からはせ参じた騎兵たちの一人だったろうか。[3] こうしてエルゼラインと呼ばれる娘は、シュヴァーベンの田舎からこの地方随一の、いや、まさしくこの時期にドイツ有数の大都会に成長したアウグスブルクへ出かけて行く（以下、この歌を〈エルゼライン〉と呼ぶ[4]）。この神聖ローマ皇帝直轄の自治都市は、十五世紀末から次第にヨーロッパ金融経済を席捲したフッガー家の本

拠地であり、アルプスを越えたヴェネチアやミラノなどイタリア商業都市との遠隔地奢侈品交易によって、既に古くからその名を知られていた。十六世紀にはアントヴェルペンとも関係が深いドイツ一の金融都市になったこの町で、エルゼラインは流行の服を手に入れるために仕事を求め、田舎から町へやってくる世間知らずの娘の、後には次第にお定まりとなる転落コースを辿ることになる。(5) この時代はまた、ヨーロッパ諸都市の経済的繁栄を背景に、女性の服飾（モード）に対する関心がエキゾチックなものへの関心と相まって広く世間に高まり始めた時期で、いくつかの名高い木版モード集（手による彩色を施したものもある）が一世を風靡するのは、この世紀後半のことである。(6) 例えばデューラーのようにヨーロッパ中で称賛された高名な画家もまた、既に十五世紀末からニュルンベルクの女たちや旅に出た先々の町の女たちの衣装を数多くデッサンしていたし、その半世紀後にはハンス・ホルバインもバーゼルの女たちのモードデッサンを残している。町の女たちの流行（モード）は、一枚刷り印刷物の普及によってもじきに田舎娘の知るところとなったろう。ファッションは昔から至るところで娘たち女たちの大きな関心事だった。ドイツやフランスの諸都市において、身分に応じた服飾を細かく規定する奢侈条例（衣服条例）は中世末から公布の頻度が増しているが、この事実は逆に、身分を度外視した贅沢が富裕な商人層を中心にとりわけ好まれ、市民の間に服装に対する関心や論議を呼び起こしていたことを証している。(7) エルゼラインの欲しがるマントもまた実用的な防寒衣ではもちろんなく、本来は身分の高い女性たちの正装に用いられていた豪華な外套が、この頃までに一般市民のファッションに取り入れられ、町の女たちの外出用の晴れ着となっていたらしいことを窺わせる。例えば少し時代は下るが、ヨスト・アムマンの『様々な国の様々な身分の女たちの美しい衣裳集』（一五八六年）には、教会へ出かけるためにマントを手にし、裾が地面まで届く長いスカートを身につけたフランクフルトの女中の正装姿が描かれている（図１）。(8) 大都市では流行は瞬く間に使用人層にまで及ぶ。スペイン風のひだ衿やパフスリーブ、マントのみならず、「足を見せることを少なからず無作法と見な」す本来的に宮廷風の作法ま

図１　ヨスト・アムマン『女たちの美しい衣裳集』より。〈フランクフルトの女中〉

でもが、一般市民はおろか、使用人層の日曜日の正装にも見いだせるのである。[9] 彼女たちの日常的現実が、アウグスブルクの女中のように胴衣と腰で端折ったスカート姿で、編み上げ靴を履いた足を見せ終日働き続けなければならなかったとしても（図2）[10]、都市で暮すことそのものが田舎娘には刺激的で魅力的に思えたろう。毎日仕事着のまま野良仕事や手伝い仕事に明け暮れて「うちで働くのが嫌になった」エルゼラインには、町の娘たちが外出の際に身につけるマントや細い紐つきの洒落た靴が、町の日常生活そのものに見えたかもしれない。都市へ流れ込む人々は、以前は田舎で食いはぐれ食い詰めた人々と決っていたし、それは依然としてこの時代の人々を都市へと促した最大の理由だった。しかし、彼女が町へやってくるのは全く新しい理由から、生活のためではなく贅沢のため、そしてその贅沢を享受するのに必要な貨幣（「黄金（こがね）」）をかせぐためである。というのも、農村ではまだ貨幣そのものが貴重であり、田舎娘には容易に手に入らないものだったから。当時のアウグスブルクはまさしく遠隔地貿易と金融経済の一大拠点として急成長を遂げつつあった。そしてその急速な繁栄は、同時代の他の多くの大都市と同様、一握りの名門富裕市民による大多数の下層市民の搾取、周辺農村共同体の漸次的解体によって成し遂げられたものだった。[11] それにもかかわらず、大都市に集中する奢侈品は人々の眼を奪い、それを手に入れるための貨幣をますます魅力的なものにする。奢侈品の情報は時には一枚刷り印刷物に描き込まれた都市生活の細部（ディテール）によっても、遠い農村にまで伝えられただろう。[12] そして次第に、生活には事欠かなかった田舎娘の虚栄心（ヴァニタス）までも煽り始めたのである。

図2　ヨスト・アムマン『女たちの美しい衣裳集』より。〈アウグスブルクの女中〉

さて、最初に迷い込んだ狭い小路（ガッセ）（それはアウグスブルクのような大都会の名物である）には、手持ち無沙汰に暇つぶしする騎兵や傭兵たちがたむろしていた。そこでエルゼラインは「最高のワインが飲めるところを尋ねた」（第三連）。シュヴァーベン人の健啖ぶり、飲食に対する情熱はこの時代からよく知られていたらしく、痛飲もまた必ずしも男たちだけの習慣ではなかった。[13] とはいえ、小娘と最高のワインの取り合せ、その無防備な〈お上りさん〉ぶりは、当然この時代の町に溢れていた放埒な男たちの好奇

の視線を集める。彼女が案内されたところは、そんな陽気な連中がサイコロ遊びをしている当時の典型的な居酒屋だった。それはしばしば売春宿の役割も果たし、ネーデルランドの風俗画が繰り返し描いたように、十六世紀から十七世紀にかけて次第に社会悪の巣窟として寓意化され問題視されていく場所、とりわけ新教諸都市の当局が厳しい監視の目を向けた場所である。[14] 酒の入った男たちはその場の余興に、ふらりと迷い込んできた田舎娘をサイコロで一番大きな目を振り出した男のものにしようと決める。一番若い男がその幸運を射当てる。「おいらがおまえをもらったよ、別嬪のエルゼライン／今夜はおまえのそばで寝よう」（第六連）。こう言われた娘はわっと泣き出し、虚勢を張って言い返す。「あたしの兄さん三人とも強いわ、父さん国ではお金持ち」（第七連）。実際に彼女には三人の兄がいて、やがてその一番年下の兄が、家を飛び出した妹を心配し、父親から旅の費用をもらって町へ探しにやってくる。すぐに妹を見つけた兄は言う。「ああ、妹よ、可愛い妹／おまえはいったいどうしたんだ／そのスカートは前が短かすぎて／後ろが長すぎる」（第十一連）。このいかにも素朴な表現は、言うまでもなく娘が妊娠してお腹が大きくなってしまったことを意味している。そしてこの歌は、次のようなやりとりで娘の家出の顛末を語り終えるのである（第十二連～第十四連）。[15]

「兄さん、愛する兄さん
そんな言い方は名誉にかかわるわ
他の男が言ったことなら
必ず取り消させてやるのに」
ああ、可愛いエルゼライン

兄は妹を馬の尻に乗せた
妹は兄から顔をそむけた
「ああ兄さん、愛する兄さん
あたしの恥を隠す手伝いをして」
ああ、可愛いエルゼライン

「妹よ、可愛い妹
お前の名誉を取り戻してやろう
金持ち市民の息子を知ってる
あいつがお前と結婚したがってるよ」
ああ、可愛いエルゼライン

エルゼラインは名誉の喪失（妊娠）を指摘する兄の言葉に一旦は反発するが、すぐに矛先を納めて、自力では脱け出しがたい窮状を訴え助けを求める。こうして物語詩（バラッド）の最後には、娘の失われ

た名誉が兄の尽力によって回復されるであろうことが暗示されている。処女性を失う原因となった男が結婚可能な出自であれば、彼女はこの兄の力を借りて、あるいは両親までも総動員して、是非ともその男に償いをさせたことだろう。このような場合に一般的な名誉回復の手段は、既に十二世紀のアベラールとエロイーズの例にも見られるように、結婚と相場が決っていた。[16] しかし、相手の男の地位が低く償わせることが叶わぬエルゼラインの場合には、アウグスブルクでの出来事は世間に伏され、「金持ち市民の息子」との縁談が急遽とりまとめられることになる。シュヴァーベンの田舎娘に兄が持ち出す花婿候補が「金持ち市民の息子」(ein reichen burgers sun) であるのは、家族に黙って家出するほど都市に憧れた妹の気持ちを慮ってのことだろうが、このような有利な結婚が可能だとすれば、その第一要件はもちろんこの家の財力に他ならない。

確かに、一度名誉（処女性）を失った娘でも、それを世間に伏して、あるいは世間の口を封じて中産層以上の市民との結婚に漕ぎつけるならば、名誉ある市民の妻という当時の女性にとって唯一安定した地位を確保することは不可能ではなかった。[17] 中世の都市法や同業組合規約は、自由市民及び組合構成員の出自や結婚に関し以前から種々の制約を設けていたが、結婚そのものが双方の家族の財産契約的な側面を強く持ち、都市の繁栄が拝金主義的な傾向を助長していた社会では、金銭によって解決できる問題も少なくなかったからである。[18] しかしその一方で、十五世紀末から十六世紀にかけて都市の経済構造が引き起こした貧富の差の拡大は多くの社会矛盾を露呈し、それに対する批判の声もまた勢いを強めていく。それまで農村から多くの流入民を受け入れてきた諸都市は次第に吸引力を失って、新参者と旧来の都市民の間に垣根を設けるようになり、二極分解が進む富裕層と貧民層の間で痩せ細りつつあった中間層の心性は、保身のために次第に閉塞化していった。都市の若者にそれまでかなりの自由を許してきた性道徳の体系に次第に批判的な眼差しが向けられるようになるのは、この文脈においてである。宗教改革運動はこのような社会状況を不可欠の土壌として起こり、都市を中心に次第に支持者を増やしていった。そして世紀半ばには急激な勢いで多くの都市が改革派への帰依を表明する。道徳的粛清を求める声は次々と法制化され、性道徳は単に宗教的モラルとして教会の管理下に置かれるばかりでなく、公序良俗の守護者となった公権力の法体系の根幹に組み込まれることになる。[19] これまでも悪い噂は娘たちの将来を暗くしたが、社会的検閲の目は十七世紀に向けてますます厳しさを増していくのである。宗教改革運動は主として都市を舞台に展開したから、地域によっては、娘の〈毀れ瓶〉が世間に明らかになった時点で、法廷に立つことを強いる場合も少なくなかった。それ

どころか後には過ちを犯した相手と結婚した場合でさえ、婚前の性関係が処罰の対象となることもあった。繁栄する諸都市に数を増したふしだらな娘たちを嘆く声は、十五世紀後半にはまだ聖職者やモラリスト職匠歌人の口から発せられるのを常としたが、十六世紀半ばにはそれにも増して厳しい非難が世俗的公権力の口から聞かれるようになる。これらふしだらという烙印を押された娘たちの中には、都市の経済構造の再編成によって極貧層に押しやられ身売りを余儀なくされた娘たち、貧困化した農村から流れ込み、季節労働と不定期の売春以外に生活手段を持たないその日暮らしの娘たち[20]が数多く混じっていたが、十六世紀を特徴づける奢侈品蕩尽型の都市文化そのものも、確かにこの現象に拍車をかけていただろう。[21]従って、流行の服を手に入れようとして名誉を失うエルゼラインの歌がまさしくこのような世紀の初めに登場したことは、極めて象徴的な意味を持っているのである。とはいえ、シュヴァーベンの片田舎を飛び出してきたこの娘の〈毀れ瓶〉は、それが傍目に明らかになった場合でも、まだ世間的な意味での不名誉に止まっている。未婚妊娠は口さがない人々の日常的なおしゃべりに恰好の話題を提供したが[22]、この時期にはまだ公的な場で取り沙汰される出来事ではなかった。それがグレートヒェンのような絶望的孤立をもたらし、社会悲劇として受け取られるようになるのは、大分後の時代になってからである。

ところで、大商業都市の繁栄と緊密に結びついて生れたこの物語詩（バラッド）が、中世盛期の先に触れたいくつかの歌や、十六世紀前半までの〈毀れ瓶〉や妊娠（豊穣の瓶）を扱う世俗歌や笑話（ファブリオ）と本質的に異なるのは、まず第一に、このできごとをファルスと見なし嘲笑する眼差しが後退していることである。それはかつて、あるいは相も変らず、このような場面にしばしば顔を出し娘を叱責・折檻する恐ろしい母親の姿が、ここには全く登場しないこととも密接に関わっている。先に触れた『カルミナ・ブラーナ』一二六歌は、身重になった娘の後日談を何も語っていないが、中世後期のいくつかの笑話（ファブリオ）や世俗歌には、このような事態に直面した娘の母親の典型的な行動様式が窺われる。例えば、『デカメロン』を模して作られた十五世紀北フランスの『新百話』第八話は、ブリュッセルのある商人の娘が、その家のピカルディー出身の若い奉公人と恋仲になり身重になった話を物語っている。若者は事の次第に気づくやたちまち逃げ出して、国に戻ってしまう。しばらくして娘の異常に気づいた母親はまず、娘を厳しく責め立て脅迫して告白を促し、真実を知るや「全く猛り立って、狂乱して、この上もなく憤って、娘を叱り始めて、無数の罵詈雑言を浴びせ」る。娘は何も逆らわずじっとこらえているが、母親はそれにも心を動かされず、こう言って冷たく家から追い出すのである。「出て行け、どこへでも行ってしまえ。そしてお前を孕ませたピカア

ル男をどうあっても探し出して、そいつのした悪さの償いをさせるんだ。そしてお前に与えた侮辱をすっかり償ってしまうまでは、決してわたしのところに戻ってきては相成らぬ。」窮地に陥った娘に対し一切の憐憫の情を示さぬこの「残酷で怒りっぽい」母親像は、間違いなく中世的伝統の中にある。娘は並々ならぬ苦労を重ねてとうとうその恋人を見つけ出すが、彼は折りしも結婚式の最中で、彼女を体よく周囲の人々の目から隠し、何はともあれ自身の結婚の遂行をはかる。身重の見知らぬ女に気づいた花嫁が不審に思い、新床で花婿に事の真相を説明するように迫ると、彼は仕方なく洗いざらいを打ち明ける。すると花嫁は賢しげに、ブリュッセルの娘が母親にすべて白状したことを嘲笑って、自分も同じ事をしたが用心して母親には一言も言わなかったと口を滑らせるのである。ここに至って恋人はこの花嫁の本性に気づき、慌てて彼女の元を去って身重の娘と結婚した、というのがこの話のいかにも笑話的な落ちである。ここにもまた、男にとって到底信用ならない愚かで性悪な女（イヴ）のイメージが、常に夫に不貞を働きかねない妻と残酷な母という形で定着している。

さらにもう一つ、『結婚十五の歓び』〈第十一の歓び〉には、身重になった美しい令嬢の話が語られている。娘の方は世間知らずでまだ妊娠に気づいていないが、邸の奥方はすぐ異常に気づいて娘を呼び寄せて言う。「以前話して聞かせましたね。おまえのしたようなことをしでかしたら最後、身の破滅だし、名誉も廃れてしまう、と。でも、出来てしまったことは、仕方がない」と、彼女は一歩譲って、口をつぐむ娘からうまく真相を聞き出す。語り手も言うように、「この種の事態は、人に気取られぬようにして、できるだけ上手に失態をとりつくろう以外、他に施す術はない」から、家柄の良い奥方にとっては何とか世間的体面を保つことの方が大事なのである。彼女は「できることなら、進んで」相手の男が「娘をめとるよう画策することもあろう」が、それが取るに足らぬ身分であったり、妻帯者であったりする場合には、もちろんそうはいかない。そこで母親は、この美しい令嬢の周りに集まってくる沢山の男たちの中から、「莫大な財産を相続する身であるし、うぶで青二才」の雅びな貴公子に目をつける。そして彼を罠にかけるべく入念な作戦を練り、娘に秋波の送り方から二人になった時の受け答えの仕方まで事細かに指示を出して、まんまとこの的を射当てるのである。彼女の娘に対する言動にはもはや「残酷で怒りっぽい母親」のイメージはない。時代的にはさほど異ならないものの、ブリュッセルの母親とは対照的なこの母親の柔軟かつ洗練された振舞い方は、もっぱら彼女の家柄の良さに起因するものと見ることができる。彼女は明らかに、既に宮廷風作法が定着しつつあった都市名門富裕層（パトリキ）あるいは富裕商人層に属しているからである。それに対し、この物語の真に中世的色調はむしろ、

世故に長けてずる賢く、ありとあらゆる策略を弄して男を騙す女（イヴ）（＝母親）のイメージに色濃く現われている。こうして娘をうまく結婚させた後の彼女の仕事は、この世間知らずの婿をいかに思いのままに操縦するかを娘に説いて聞かせることであろう。中世笑話や謝肉祭劇には、十六世紀に至っても、結婚した娘を始終訪れて亭主を尻に敷く方法をつぶさに教える母親がしばしば登場するが、『結婚十五の歓び』にもこの類の話は多い。結婚前の娘は彼女の恋をめぐってしばしば母親と対立・抗争関係にあるが、逆に結婚後の娘と母親の近さを物語る笑話も数多く、そこではもちろんこのような母娘の結託がもたらす夫にとっての災禍が強調されている。[23]

これに比して、母親が全く姿を見せない〈エルゼライン〉では、娘が「陽気な連中」の一人に言い寄られ窮地に陥った時に、兄と父がその守護神として登場する。このことが既に、中世盛期の世俗歌で娘の口から語られる家族（父親、兄、そしてとりわけ母親）や笑話（ファブリオ）の母親の否定的性格との大きな隔たりを示している。というのもこれまでの恋愛文学の伝統においては、家族は彼女を守るよりむしろ窮地に陥れる危険な存在だったからである。恋が結婚と全く結びつかない世界にあっては、娘の家族は常に恋を邪魔立てするネガティヴな存在だった。エルゼラインの不幸もまたいわば都会とその奢侈品に恋した結果であり、家族の意に反して町に出かけ、名誉を失い身重になったこの娘の窮状は、これまで見てきた娘たちのものと本質的に変りはない。ところがここでは体面を重んじる世故長けた母ではなく、兄と父が彼女の願いどおり守護神として行動している。家出した妹を心配して探し出し、彼女を助け、意にそった結婚を用意するのは兄であり、彼がアウグスブルクへ妹を探しに行こうと思い立った時に求めに応じてその費用をまかない、後には婚資をもまかなうのは父なのである。この世俗歌の背後には、女の性悪さと愚かしさを揶揄するお馴染みの中世的哄笑とははっきり異なるもの、即ち父権的な〈家〉の構造が透けて見える。それはもちろん、伝統的な民衆文学（十五世紀あたりからは町民文学あるいは都市文学と言ったほうが正しいかもしれない）の中に定着していた性悪な女のイメージ、とりわけ〈支配する女〉のイメージの背後に、常に歴然と存在していた世俗的原理であった。無軌道な女の引き起こす無秩序に秩序回復をもたらす男性的な力の誇示、そしてその力を持たない弱い男への制裁は、ヨーロッパのカーニヴァル文化の重要な構成要素であり、それが素朴と言って済まされない極めて暴力的な実態を伴っていたことは、近年の多くの研究が明らかにしている。確かにこの歌全体の調子はいかにも軽く、単純な田舎娘をめぐる種々のモチーフも戯れ歌とほとんど変らない。しかしここに見出せる新しい要素は、この男性的支柱をもつ家族が娘の不名誉な事態に柔軟に対

処し、若気の過ちを家族的情愛によって温かく包み込もうとしている点にある。ここには近代的核家族の理念につながる一つの重要な心性が現われている。家父長が単に〈家〉という経済共同体の長であるに止まらず、神への愛と家族相互の愛情の靭帯によって一つに結びついた共同体の長でもあることを要請するルターの新教的かつ人文主義的家族観は、このような心性の微妙な変化（柔軟化）を投影してもいたのである。[24] ギルドや同職組合（ツンフト）など同業者を保護する強力な組織の綻びが目立ち始めた中世後期の都市社会は、基本的に酷薄な人間関係から成り立っていた。都市の繁栄による貧富の差の拡大は多くの家族を破滅に導いたが、逆に、動揺する社会の中で唯一家族の結束だけが状況の克服を可能にすることもしばしば起きた。十六世紀初頭の混沌の時代には、一方では伝統的価値観が強化されるとともに、他方では種々の新しい価値観がその可能性を模索していた。娘が犯した過ちに対する父権的家族の対応は、十七世紀以降は却って厳しいものになっていくが、〈エルゼライン〉の歌にはその過渡的な状況が素描されているのである。

しかしその過渡的性格の儚さは、例えばこの歌の一枚刷り印刷物から少し時代を下ったハイデルベルク写本の異曲[25]にも如実に窺うことができる。名誉を失い家から叩き出された娘を笑いのめす中世的心性がまだかなりの勢いを保っていたこの時代には、過ちを犯した妹に対する兄の温かい情愛や、彼女に用意された幸福な結末に肯んじ得ない一種カーニヴァル的な悪童精神が躍如としていたに違いない。この異曲はまず冒頭の一・二連を改変することによって娘の性格を伝統的な笑話の方向に大きく近づけている。それは同じく「シュヴァーベン男に娘がいた」で始まるが、この歌の娘（ここでは名を挙げられていない）は奢侈品に憧れるエルゼラインとは異なり、前述した擬似ナイトハルトの歌やあの「瓶を守れよ」のルフランを持つ歌と同様、早く夫（男）が欲しいとじりじりしている早熟な田舎娘の典型（タイプ）[26]なのである。しかも同様に、第二連は母親と対話するような形式をとって（実際には母親の応答はない）こう続いている。「ああ母さん、あたしにマントとスカートを仕立てて／それから細い飾り紐を一本／あたしはヴュルテンベルクにいくわ／そこで黄金を稼いでくるの。」（第二連）こうして跳ねっ返り娘はめかし込んで町へ出かけて行き、エルゼラインと同じ運命を辿る破目になる。町に着いてから彼女が出会う出来事は多少の異同はあれ、本質的な違いはほとんどない。ところが最終連のわずか一語のすり替えが娘の結婚の先行きを決定的に暗いものにし、歌全体の〈落ち（ポワンテ）〉を用意するとともに、この歌の本来的に異なる意図を明るみに出す。というのも、娘の名誉回復の願いに対し、この異曲で兄が持ち出す結婚相手は「年季の明けた織布工（ein freien webers knab）」だからである。「金持

ち市民の息子」と「織布工」の身分的落差が、中世後期のこの時代にどれほど大きいものであったかは、当時の別の世俗歌からも容易に推測できる。十六世紀の世俗歌には、織物職人たち（webersknaben）に言及しているものがいくつかあるが、とりわけアウグスブルクの織布工が親方からひどく搾取され、ほとんど乞食同然に扱われている様子を歌った歌は、この関連で興味深い。そこでは労働条件に関する親方の狡っからい約束違反が語られ、「冬に小雪の舞うときにゃ／戸口に投げて寄こした藁布団だけで／織布工は身を寄せ合わにゃならん／明るい夏がやってくりゃ／ベットを使えと引っ張り出すのさ」（「新しい歌を歌って聞かせよう」[27] 第八連）と、その強欲ぶりが歌われている。冬はベットに掛ける毛布を節約して職人の体を藁に包ませ、ベットを使わせるのは何も上掛けを必要としない夏だけ、という非人間的な待遇なのである。世俗歌の中で言及される織布工たちはしばしば謂われない軽蔑の対象となっているが、ドイツやフランドルの中世都市史料もまた、織布工の地位が種々の職人に比して特に低かったことを裏付けている。[28] 従って〈エルゼライン〉の異曲は、娘の名誉回復がかつがつそのような貧民層の男との結婚によってしか実現しえないという当時の社会通念を代弁しており、ここでも繰り返されている「父さん国ではお金持ち」という言葉が事実として意図されているのか、それとも娘が咄嗟に思いついた虚言なのかは措くとして、彼女は結局自身の尻軽さのツケを払わされることになるのである。伝統的な戯れ歌の調子を強めた冒頭はこうして首尾一貫した結末をもって終り、お馴染みの中世笑話的文脈で軽率な娘の家出の顛末を嘲けりながら、その一方でこの時代にふさわしく、娘たちに同様の愚行を戒める皮肉めいた説教の役割を果してもいる。確かにこの歌の教えるものは本質的にカッツの諺詩のそれと異ならない。しかし約一世紀を隔てた後者の詩では、娘の失敗に対する広場的哄笑がはっきりと響きを弱めている。この異曲の作者は、当時流行した身分不相応な恋人（結婚相手）を望む娘たちへの嘲笑歌[29] と同様に、男たちを一緒に笑い一緒に嘲るよう促しながら、そのついでに娘たちの軽はずみな行動に釘を刺しているのだが、カッツの方は失敗を後悔する娘の口から直接娘たちに向かって、より真面目な口調で娘の守るべきモラルを説くようになっているのである。

　因みに、妹の蒙った不名誉に兄が復讐を遂げるというもっと劇的でロマンティックなモチーフならば、家門の名誉を重んじるスペイン的父権制の伝統とも絡みあって、騎士物語やドン・ホアン伝説の系譜に以前から存在していた。十六世紀には、いわゆる秘密結婚をめぐる議論が福音主義や宗教改革運動とも結びついて一大論争に発展するが、この関連で『創世記』（三十四）が語るディナの凌辱とその兄たちによる復讐の物語もしばしば古典的な例と

して引き合いに出されている。[30] 世俗歌においても騎士物語的なモチーフはまだ根強い人気を保っていたから、騎士の兄が誘拐されて危機に瀕した妹を見つけ出し、助け、あるいは殺された妹の復讐を遂げる物語詩（バラッド）は、この時代から十七世紀にかけて広くヨーロッパ中に流布している。追剥強盗と化した騎士のもたらす災禍が生々しい現実だった時代に、その強盗騎士が高貴な娘の誘惑に用いる手段がロマンティックな〈後朝（ターゲリート）の歌〉であったりするこの種の古今折衷荒唐無稽な歌は、時にはゴシックホラー的な要素も交えて、昔ながらに古い城と暗い森を舞台としている。[31] しかし、都市に生きる人々にとっての現実的な心の風景はもはや城や森ではなく、アウグスブルクにやって来たエルゼラインが眼にしたような大きな建物の建ち並ぶ大通りや、そこに幾筋も切れ込み迷路をなしている小路（ガッセ）だった。都市的日常生活を営む心性にとっては、凌辱された妹の復讐を遂げるヒロイックな兄の姿よりも、もっと穏便で実質的な視点から妹の名誉回復に尽力する兄の姿の方が、はるかに現実味（リアリティ）を持つ存在だったに違いない。この世俗歌は、一つには、窮地にある妹を助けるという伝統的な騎士物語のトポスを用い、それを新たに出来した都市社会の細部によって読み換えたところに誕生している。そこに示された新しい物語の可能性は、家族的情愛が次第に身近なものと感じられるようになった人々の心に訴え、あるいは都市的に分断された人間関係の中でそのような愛情に飢えた人々の憧れを掻き立てもしただろう。しかしそれが主流として定着して行かなかったのは、瓶を毀した自分の娘（妹）を庇護する余裕のある家族が限られていたばかりでなく、瓶を毀した他人の娘に対する世俗的関心が概してそれほど寛大ではなかったからでもある。自身の名誉に汲々とする人々は、互いに相手の名誉問題に対しても極めて敏感だった。[32] この意味で〈エルゼライン〉の結末は、その騎士物語的枠組みと同様、ほとんど〈お伽噺〉に近かったのである。（以下次号）

注

(1) *Deutsche Volkslieder mit ihren Melodien*, hrsg. Deutschen Volksliedarchiv. 4er Band. 1959. Nr.73, 1b (p.39-54)（以下 DVldr と略記）/*Volks- und Gesellschaftslieder des XV. und XVI. Jahrhunderts, Die Lieder der Heidelberger Handschrift. PAL.343.* hrsg.v. Arthur Kopp. 1904/1970 No.52 (p.56-7) /Ludwig Uhland: *Alte hoch- und niederdeutsche Volkslieder.* 1er Band. No.257 (Elslein) und Anm. 一枚刷り印刷物として十六世紀初めに流布したこの歌は、この世紀半ばに成立したと見られるハイデルベルク写本（343）に綴り字の違いを除けばほぼ忠実な形で筆写されている。

(2) 注一に挙げたテキストの註釈を参照。cf. ibid. p.45

(3) シュヴァーベン地方は当時、皇帝軍を構成した歩兵傭兵（ランツクネヒト）や騎兵の重要な供給地の一つだった。この歌はかなり早い時期にネーデルランドに伝わり、そこでもいくつかの異曲を生んでいる。ほぼ忠実なオランダ語訳

の他に、エルゼラインがこの騎兵たちと一緒に家出したことを暗示しているものや、彼女の娼婦的な尻軽ぶりを強調するものもある。cf. *Het Oude Nederlandsche Lied,* wereldlijke en geestelijke Liederen uit vroegeren tijd. Teksten en Melodieen, verzameld en toegelicht door Fl. van Duyse. 1965. 2.Deel. Nr.288. Des hadde een Swane een dochterlijn. p.1029-33.

(4) この歌は、中世の世俗歌が一般にそうであるように、本来個別のタイトルを持たず、必要に応じて第一行目の詩句によって名指されるのが普通である。しかし後代には、〈エルゼライン〉（エルスライン）あるいは〈美しいエルゼライン〉の名が付けられているので、この論では同じ詩句で始まる別の歌と区別するために、以降この名を用いる。

(5) この歌の女主人公エルゼラインがシュヴァーベン出身とされているのは、ちょうどこの当時から広まり始めたシュヴァーベン女についての悪い風評を意識したものと言えるだろう。諺事典には十六世紀に広まった言い回しとしてシュヴァーベン女の尻軽さを揶揄するものがいくつもあり、その代表例として〈シュヴァーベンは世界中に足りるほどの娼婦を、バイエルンは同じほどの泥棒を供給している〉〈シュヴァーベンの尼さんは、子供を産んだことがなければ純潔〉などが挙げられる。cf. *Deutsches Sprichwörter-Lexikon: ein Hausschatz fur das deutsche Volk.* ed. Karl Friedrich Wilhelm Wander. 1867/1964. article: Schwaben, Schwabenland. / Lutz Röhrich: *Lexikon der Sprichwörterlischen Redensarten.* 1973. art: Schwabe./ Hermann Werner - Erika Neuhäuser: *Die Schwäbin.* 1947. p.78-90 DVldr もまたこれらの資料を踏まえてこの点を指摘している(cf. ibid.p.46)。しかし例えばネーデルランド女、あるいはフランドル女の尻軽さに関する風評は、これ以前からヨーロッパ中に流布しており、歴史的にも十五世紀のイタリア、南フランス、南ドイツ諸都市の公娼館にはこの地方出身の娼婦が多かった(cf. Richard C. Trexler: *La prostitution florentine au XLe siècle*: patronages et clientèles. in: *Annales,* 36 Annee-No6, 1981 esp. p.985-7 / P. Schuster: *Das Frauenhaus. op. sit.* p. 及びロシオ『中世娼婦の社会史』48頁、142頁参照)。彼女たちの浮気さは十六世紀の著作にも言及され、世俗歌にもしばしば歌われている（cf. *Ambraser Liederbuch.* 1582/1962 Nr.77 / Uhland: *Volkslieder.* 1er Band. Nr.49 und Anmerkungen./ *Hans Sachs,* herausgegeben von A.v. Keller und E. Goetze. XIV. Band. 1964. (Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Stuttgart. 1882) Faßnacht-spiel Nr.23. *Der jung kauffman Nicola mit seiner Sopia.* p.91 ここではイタリア商人のしたたかな恋人が、「(…) あたしはフランドル生まれ／馬鹿な男を次々手玉にとるのが／あたしの商売戦略よ」と語っている。)。従って、これらが何かしら根拠のある言説であるとすれば、それは民族性というよりむしろ、遠隔地交易や金融の拠点として繁栄した富裕都市及び周辺農村の経済・社会構造と密接に結びついた時代と考えられる。シュヴァーベン地方には当時、イタリアとネーデルランドにつながる遠隔地交易の要路に沿った多くの大きな帝国自由都市が存在していたからである。後述するが、この歌と同じ時代に同様に広く流布した世俗歌にも若者と一緒に家出する娘（娘の出身地は異曲によってまちまちである）を歌ったものがかなりあり、〈エルゼライン〉の作者の意図は当時のシュヴァーベンについての風評を反映するものだとしても、その種の風評そのものはもっと深刻な時代現象と関っているに違いない。

(6) cf. Max von Boehn: *Die Mode.* bearbeitet von Ingrid Loschek. 4. überarbeitete Auflage, 1989. Bd. 2. and *Frauentrachtebuch von Jost Amman.* Mit kolorierten Holzschnitten der Erstaufgabe von 1586 und einem Nachwort

von Manfred Lemmer. esp. seinen Essay "Jost Ammans Frauentrachtenbuch" p.71-89 イタリアの画家エネア・ヴィーコのモード画集が出版されたのは一五六二年で、モード挿絵画家としてドイツで評判をとったヨスト・アムマンは、この画集から大きな影響を受けている。彼は一五七七年のモード集（ニュルンベルク）と一五八六年のモード集（フランクフルト）に挿絵を付けているほか、ハンス・ザックスの『身分・職業の書』(*Jost Amman, Das Ständebuch*, ed. by Manfred Lemmer, 1975. reprint of *Eygentliche Beschreibung aller Stände auff Erden... durch den weitberümpten Hans Sachsen*,1568）の挿絵によっても名高い。

(7) 相沢隆「奢侈条例と中世都市社会の変容―南ドイツ帝国都市の場合―」『史学雑誌』97―6（一九八八年）を参照。奢侈条例は十四世紀から多くの都市で出され始めるが、当初は共同体の団結を強め、そこからの逸脱を防止することを目的にしていた。ところが十五世以降、この条例の目的が次第に身分を可視化する方向に変化し、事細かな規定を設けるようになる。ニュルンベルクの奢侈条例では、この頃から始まった流行（モード）の目まぐるしい変化に対応するために、これまで行われてきたような衣服の具体的な型に対する制限を金額による制限に改めている。この条例の違反者は圧倒的に富裕商人層が多かった。また、ハンス・デュルメン『近世の文化と日常生活2／村と都市』第四章、身分と名誉、252頁以下も参照。

(8) 図に付された詩にはこう書かれている。「フランクフルトのお女中が／時たま教会に行こうって時は／夜中の間に降って湧いた／空しく熱い信心ごころに駆られ／新しい服でめかし込んで／用意万端通りにお出まし／椅子とマントを腕にかけ／主よ、我を憐れみたまえと祈る」ibid. *Frauentrachtenbuch*, fol. L

(9) 衣服条例にはスカートやマントの長さまで規定しているものがあった。例えばコンスタンツの一四三六年の規定では、一般市民の女性が三フィンガー以上地上を引きずる衣服は着てはならなかったし、女中は地上に届くものまで禁止されていた（相沢隆、前掲論文二一頁参照）。アンマンの衣裳集に描かれた女中たちも働き着では足を見せているが、休日の衣服がどうだったかはフランクフルトの例しかない。

(10) 図に付された詩にはこう書かれている。「アウグスブルクの女中は金持ちじゃないが／それでも恰好はみんなと同じ／いつも元気に向うからやってくる／横丁をまるで我が物顔に／白い編み上げ靴を履き／スカート端折って走りまわる／ご主人様への奉仕は忠実／だからどこでも好かれてる」ibid. *Frauentrachtenbuch*, fol. H ii　女中の恰好がみなと余り変らないと言われているのは、身ぎれいにしているというほめ言葉であると同時に、アウグスブルク市民の大部分が下層民あるいは無産市民であった(cf. Rolf Kießling: Bürgerliche Gesellschaft und Kirche in Augsburg im Spätmittelalter. 1971) ことにも関係しているだろう。

(11) アウグスブルク市民の総資産は一四七〇年から一五〇〇年までの間に約四倍、続く一五〇〇年から十六世紀半ばまでの間に約十三倍に達したが、その反面、貧富の格差は極端に広がり、僅少資産民あるいは無産市民はおよそ九十パーセントに達していたという(cf. Marion Tietz-Strödel: *Die Fuggerei in Augsburg*. 1982. p.20-21)。このような傾向は、同時代のフランスの諸都市にも指摘されている（G. Duby, ed., *Histoire de la France urbaine*, II, p.494-499)。南ドイツ自治都市の政治状況については、cf. Gerd Wunder : *Gesschlechter und Gemeinde*. Soziale Veränderung in Süddeutschen Reichsstädten zu Beginn der Neuzeit. In : *Die Stadt an der Schwelle zur Neuzeit*. hrsg. W. Rausch. 1980 p.41-52

(12) 十五世紀末から活発になる〈一枚刷り〉の出版は、当時、新聞のような役割も果していたが、アウグスブルクはニュルンベルクと並び、際立ってその種の印刷物が多かったことでも知られている。

(13) 当時のシュヴァーベン女の飲酒については、cf. Die *Schwäbin*. p.80 シュヴァーベン人の食欲・大飲大食を揶揄する諺も多く、その起源をこの時代にまで遡ることができる。cf. *Deutsches Sprichwörter- Lexikon*. article: Schwaben, Schwabenland. しかし、ニュルンベルクのハンス・ザックスにも大酒飲みの女房が悪い女房の一つの典型として何度か登場していて、この点についてもやはり、単なる一地方の習性とは異なる解釈が可能だろう。また、大酒飲みをドイツ人の国民性と見る外国人の旅行記中の記述も多いが、この場合にはもっぱら男が対象になっている。

(14) 居酒屋に対する非難は、七つの大罪と絡めて既に古くから教会の説教にしばしば登場している。十三世紀の聖王ルイに関する教訓説話でも、説教の途中で脱け出して居酒屋に足を向けた民衆を教会に連れ戻した王の逸話が語られ（ジャック・ル・ゴフ『中世の高利貸』渡辺訳、法政大学出版局、８頁参照）、居酒屋は長い間教会の敵と見なされてきた。教会の鼻先で営業する居酒屋や売春宿（両者はしばしば一体化している）は元来かなり多かったらしく、十六世紀の諸都市はこれらの店の営業場所を強制的に移転させたり、一定の場所に限って営業を許可したりと積極的な方策を講じるようになっている。同時代のネーデルランドの風俗画にも、教会と居酒屋を同一の構図に収めたもの（〈放蕩息子の帰還〉のテーマと関連が深い）が数多く描かれて、居酒屋を悪魔のいる場所の寓意としている。

(15) この歌の第三連から第十一連までの訳を次に挙げておく。「（第三連）娘は町にやってくると／狭い小路が走る町に／そこで早速一番いいワインを尋ねた／騎士と従者がすわっているところで／ああ、可愛いエルゼライン（第四連）そうして娘が酒場に入ると／誰かがさっと飲み物をさし出した／娘は目を伏せ／盃を取り落とした／ああ、可愛いエルゼライン（第五連）そこには陽気な連中が三人すわり／サイコロ遊びに興じてた／一番大きい目を出した奴が／エルゼラインと寝ることになった／ああ、可愛いエルゼライン（第六連）／中でも一番若い男が／一番大きい目を振り出した／「おいらがおまえをもらったよ、別嬪の娘さん／今夜はお前のそばで寝よう」／ああ、可愛いエルゼライン（第七連）／そうして娘はベッドにすわり／そこでわっと泣き出した／「あたしには立派な兄さんが三人／金持ち父さんが国にいるわ」／ああ、可愛いエルゼライン（第八連）「おまえに立派な兄貴が三人／金持ち親父が国にいても／おまえはきっとそういう娘／一人で寝たくはないだろう」／ああ、可愛いエルゼライン（第九連）中でも一番若い兄が／一番立派な兄だった／「ああ父さん、愛する父さん／わたしの財布に金を下さい」／ああ、可愛いエルゼライン（第十連）兄はアウグスブルクにやってきた／とある狭い小路に／そうして最初に見かけたのが／一番愛する妹だった／ああ、可愛いエルゼライン（第十一連）「妹よ、可愛い妹／おまえはいったいどうしたんだ／そのスカートは前が短かすぎて後ろが長すぎる」／ああ、可愛いエルゼライン」。また歌の最後には、この時代の職匠歌や世俗歌によく用いられた形式に則り、歌い手の自己紹介がついている。「（第十五連）この歌を歌って聞かせたのは／新しく歌い上げたのは／三人の立派な騎士たち／この歌はアウグスブルクに響き渡った／ああ、可愛いエルゼライン」

(16) アベラールはその第一書簡（『わが不幸の物語』）の中で、エロイーズの妊娠に対する叔父（父？）フュルベールの激しい立腹をなだめるため

に「私は彼の期待以上の償いを申し出た。それは誘惑した乙女と私が正式に結婚するというのである」と述べている。エロイーズはある貴族の私生児だったとも、パリの司教座聖堂付参事会員フュルベールの実子だったとも言われる。従って、その出自が騎士階級であり、当時既にスコラ哲学者として高い名声を得てもいたアベラールとの結婚は、市の富裕名士ではあれ単なる市民に過ぎないフュルベールにとって、確かに「期待以上の償い」だったろう。ただし、彼の申し出た「正式な結婚」は秘密裏に行われ、結婚後も世間には伏されたままだったから、叔父にとっては言葉の本来の意味での名誉回復にはならなかった。なぜなら、名誉あるいは名誉回復とは、公けの場での証人、公けの人々の承認の眼差しと不可分のものであり、神の前での結婚は世俗的な名誉の領域とは異なる次元のものだったからである。この事件は、それまで主として世俗的社会契約と見なされてきた結婚を教会が秘蹟（サクラメント）の一つに組み入れ始めた時期とほぼ重なっており、以降、結婚の成立条件をめぐって教会法と世俗法とは延々と争いを繰り広げることになる。十六世紀に大きな社会問題となった〈秘密結婚〉の当否をめぐる論争も同じ文脈にある。

(17) この事情は、当時の農村共同体においても同じだったろう。これ以降、都市の道徳観が次第に逸脱を許さない厳格さを徹底していったとき、農村の方がこのような事態にある程度まで寛容であり続けた。

(18) ロシオ（前掲書及び論文）のフランス南部諸都市に関する研究は、かつては瑕疵ある結婚に対し暴力的な喧騒行為（シャリヴァリ）によって異議を唱えた若者組織が、都市ではこの頃から次第に罰金を課す方策をとり始めていることを明らかにしている。ドイツの同様の組織（若者兄弟団）もまた、フランスほど活発にではないが、同様の活動をしている。

(19) この面に関するドイツ諸都市の状況は、特にアウグスブルクについては、cf. Lyndal Roper: *The holy household, women and morals, in Reformation Augsburg*. 1989 and Disipline and Respectability, Prostitution and the Reformation in Augsburg. In: *History Workshop Journal* Vol.19 1985 及び、デュルメン、前掲書、第五章「公的秩序と社会的葛藤」を参照のこと。

(20) 十六世紀への転換期には、都市へ流れ込む女性の放浪民が目だって数を増しているが、この現象は北ヨーロッパにほぼ共通している。

(21) 十六世紀ドイツ諸都市の様々な層の市民が示した名誉観と奢侈文化の関係はデュルメンの前掲書に詳しいが、N・Z・デーヴィスやロシオの研究はフランスでも同様の現象が数多く見られたことを明らかにしている。名誉を誇り名誉を維持するための散財欲求は、有力富裕市民のみならず職人階級の行動までをも支配していた。このような市民の名誉熱は、散財という形では次第に沈静化していくが、小市民的しかつめらしさと結びついた名誉への執心ぶりは十七世紀においても顕著で、同時代のロトゥルーやモリエールのしがない登場人物たちは、常に自身の名誉を気にかけている。

(22) 未婚妊娠は、都市と田舎とを問わず女たちの恰好の話題だったと見える。ハンス・ザックスは町の〈紡ぎ部屋〉の主婦たちに、料理人の娘のお腹が目立ち始めた話をさせている。cf. Hans Sachs: *Sämtliche Fabeln und Schwänke*, 1. Band, Nr.86 Die geschwätzige Rockenstube.

(23) 未婚のまま妊娠し結婚が不可能な場合に、娘が恋人と一緒に故郷を出奔することも古くから文学的ステレオタイプになっているが、トレクスラーはこのような典型的カップルが実際にフィレンツェの公娼館で働いていたケースを二つ挙げている。Trexler: *op.cit.* p.988

(24) 十六世紀の都市民における家族的心性の微妙な変化、相互的愛情による関係柔軟化の萌しを指摘することは、中世の家族間に愛情の靭帯が存

在しなかったと主張することではない。アリエスの『子供の誕生』が巻き起こした議論は、近年ではかなり否定的な論調を強めており、子供に対する親の愛情、家族間の愛情は基本的に何も変化していないとする研究者も多い。本論はむしろ、この愛情の質と持続性（それは自身の利害に対してある程度まで距離をとり、子供を教育する立場を自覚することによって可能になるものである）において、つまり愛情のある種の客観視において変化が生じていると考えている。残された数少ない資料から市民の家族間の愛情という見えにくい問題について述べることは難しいが、広い意味での文学資料から、この時期により親密な家族関係が描写され始めていることが跡付けられる。この現象はやはり現実の家族関係とも関連し、以前にも触れたように（『毀れ瓶Ⅲ』言語文化論集第23巻第1号、14頁参照）、家族関係に対する社会的な眼差しと意味づけの変化を投影している。

(25) この異曲は一五一六年の日付のあるハイデルベルク写本 109 にある。筆者は主として DVldr, Nr. 73, 1b の注に付された初出とこの写本との異同部分、ウーラントの同様の注、ゲレスの歌集を参照した。ただし、ゲレスの読みはかなり間違いが多い。cf. Uhland: *Volkslieder* Vol.II p.238 und Joseph Görres: *Altdeutsche Volks- und Meisterlieder aus den Handschriften den Heidelberger Bibliothek.* 1817/1967. p.185-6

(26) このタイプは、女は性的欲求が強いとする中世的女性観を踏襲するもので、既に触れたように、偽筆ナイトハルトの歌にも顕著だが、十六世紀前半にはまだまだ支配的な女性像だった。

(27) Uhland: *Volkslieder.* IIer Band. Nr. 269 (p.702-4)

(28) 因みに、家の職人たちに対しては冷たく、商人の恋人を持って鼻高々になっている麻織物職人の親方の娘を歌った歌もある。彼女は最終連でこう嘲られている。「娘は頭を振りかざす／まるで荘園でも持ってるみたいに／それでも彼女は紡がにゃならぬ／そして娘を食わせるために／親父は織機を動かしてる」Uhland: *Volkslieder.* IIer Band. Nr. 270(704-6)」十五・六世紀の麻織物工の社会的地位に関しては cf. Richard van Dülmen: *Der Ehrlose Mensch.* 1999 p.18-42　その他多くの著作がこの事実を指摘している。アウグスブルクのフッガー家の慈善事業とその社会背景については、cf. Marion Tietz-Stödel: *Fuggerei in Augsburg. Studien zur Entwicklung des sozialen Stiftungsbaus im 15. und 16. Jahrhundert.* ドイツでは一般に、繊維業に携わる市民のうち毛織物工は富裕層に属し、麻や綿の織布工は無産層に属した。十六世紀の遠隔地商業型の大都市ではどこも貧富の差が大きくなっているが、早くから織物マニファクチュアが発展していたアウグスブルクの分化は極端に進み、貧乏な織布工があふれて搾取者であるフッガー家の慈善事業の対象となっていた。しかしこの都市では、その数の圧倒的な多さによるものか、他の都市とは異なって麻織物工を蔑みの対象とすることを禁じている。

(29) 前注で触れた麻織物親方の娘の他に、靴職人の娘に対しても高望みを嘲る歌がある。また、食肉職人など、地位が一定高かった職種でも、同職の結婚相手を退けて分不相応の相手を望む娘が嘲笑されている。cf. Uhland: *Volkslieder.* IIer Band. Nr. 271, 272

(30) 福音主義者ラブレーもまた、カトリックを批判し世俗権力の主張する秘密結婚の無効を支持する文脈で、このディナの話に触れている。『第三之書パンタグリュエル物語』第四十八章を参照。

(31) 素材としては中世から存在し、十六世紀後半に流行った〈ウーリンガー〉はこの種の世俗歌の代表的な例であり、一枚刷り印刷物の形で様々な都市で何度も繰り返し出版された。ウーラントがその注で指摘し

ているように、騎士が娘を誘拐する同工異曲の物語詩はヨーロッパの北から南まで数多い。cf. *DVldr*, Nr.41 und Textkommentar / Uhland: *Volkslieder*. Nr.74 Ulinger und Anmerkung

(32) cf. Richard van Dülmen: *Der Ehrlose Mensch*. 1999. p. 1-17 及びデュルメン、前掲書